『心を呼び覚ます声』ヨハネ5:1-9

5:1 こののち、ユダヤ人の祭があったので、イエスはエルサレムに上られた。
5:2 エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。
5:3 その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。〔彼らは水の動くのを待っていたのである。
5:4 それは、時々、主の御使がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっ先にはいる者は、どんな病気にかかっていても、いやされたからである。〕
5:5 さて、そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった。
5:6 イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に「なおりたいのか」と言われた。
5:7 この病人はイエスに答えた、「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」。
5:8 イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。
5:9 すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。その日は安息日であった。

●序論
人は神さまとのコミュニケーション（気持ちを伝え合う会話）ができる存在として造られています。そこにこそ本来の安心があります。
ただ一方で聖書は、人が神さまに背を向けて自分中心で生きてゆくことを好み、そしていつしかそのコミュニケーション能力が廃れてしまった。それが「罪」です。
そんな私たちのもとに、人となって遣わされた神の子イエス・キリストが近づいてくださり、話しかけてくださり、触れてくださいました。その数々の物語が、この新約聖書の福音書と呼ばれるところに記されています。

●本論
Ⅰ．ひとりのために来て下さる

今日お読みしたところの出来事は、「安息日であり、またユダヤ人の祭りのある日」だったと記されています。
　当時の体の不自由な人や病の人は、そのような存在として社会の影に追いやられていたのが実際だったのです。

今、イエス・キリストは、宮の中心で行われる祭りではなく、その町の影の部分。「羊の門のそばにあるベテスダの池」のところに行かれたのです。
　　そこには、病人、盲人、足萎え、やせ衰えた人たちが大勢体を横たえていました。
おそらくそこにはそういう人々がつくりだす場所の雰囲気があったことを想像します。
それは決して明るい雰囲気ではなかったかと。
イエス様は、安息日に、祭りの賑わいを背にしてそこへやって来ました。

ここに「ひとりのために」というイエスさまのお姿があるのです。

Ⅱ．ありのままを見てくださる

「そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった。」とあります。
その悩みの深さ、辛さはわたしたちの想像の及ばないものかもしれません。
イエス様は、この人が横たわっているのを見、そしてこの人が長くその病で悩まされているのを知って、こう問いかけられました。「なおりたいのか？」と。
わたしたちなら、その痛みや苦しみの歳月を思いみて、「本当にお辛いでしょうね。」と声をかけること、その痛みに耳を傾けること、それ以上は、何も言えないのではないか…と思います。

このような言葉がけは、大切なことだと思います。
そんな中、彼の悩みの年月を聞き、その現実の苦しみ横たわる人を見て、イエスさまは、まっすぐにその人に向かい「なおりたいのか？」と問いかけられた…というのです。
みなさんは、この様子をどんな風に思われるでしょうか。

私の感覚からすると、これはとても失礼な問いかけに思えるのですが、…
でも、このまっすぐな質問によって、この病の人がかかえてきた、いろいろな思いが引き出されてきました。
この人は「はい、治りたいです！」とまっすぐに答えたのではありません。
おそらく答えられないほど、心の奥底から傷んでいたのでしょう。
「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」。
38年もの病の年月と日々は、この人の心を否定的な思いで蝕でいました。
彼の言葉の中に、周囲の人の憐れみの無さに対する批判的な思い、自分の生い立ちや境遇、今置かれている状況と失望感の一切が溢れ出ているように思います。

信仰論から言えば「はい治りたいのです！」というのが、正解。しかし、この人の答えには、38年かけて蓄積されてきた痛みに満ちた思いがあふれ出て来たのです。
彼にとってそのありのままを吐き出すことで、本当の心を表すことができたのです。
さて主イエス様はこの人の答えそのありのままを聴いて、受け止めて下さったことを、ぜひ覚えていてください。
ここにイエス・キリストの愛と慈しみの大きさ見るのです。

実はわたしたちもそうなんです。自分が十分信仰的になれたから救われたのではありません。百点満点の答えができたから癒されるのでもないのです。
「よくなりたいのか」との声がどんなふうにその人に、そして今これを聞いているわたしたちに響いているでしょうか。

心のありのままを神さまに知っていただくことができます。

訴えていいのです。恨み言、また否定的な思いであろうとありのまま、知っていただき、そうしてただイエス様にゆだねるのです。

それだけでいい、そういうイエスさまとの対話の中に入ること、それが実は、真実な祈りの姿であり、信仰なのです。

Ⅲ．神の国のみわざをもたらす方

イエスさまは、「いやされたいのか」と聞くだけではなく、ここでこの人をお癒しになりました。
そこでは　彼の応答を促してこう語られたのです。
5:8 イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。

この言葉は、権威と確信に満ちた大胆な呼びかけであったことがわかります。
「起きて」と訳されている言葉は、原語では「目を覚まして」「よみがえって」とも訳せる言葉です。

すなわちそれは、彼の体ばかりでなく、その心にまで響くイエスさまの思いのこもった声です。さっきまで悔しいほどに、自分の情けない本音をさらけだした。　だからこそ、彼は応答できたのです。
ああ、かつてここに来たのは、癒されるためであったことを思いだした。その彼は、イエスさまの言葉に心と体をもって応答した時、不思議なことが起こったのです。
5:9 すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。
あまりにもあっけなく思えるほど、すっと立ち上がる彼の姿がそこにありました。彼は確かに、そこで癒しを経験したのです。

最後に）
わたしたちは、「御国が来ますように、みこころが天になる如く、地になりますように…」と祈ります。
キリストによってもたらされた神の御国の御業がここに現れています。神の恵みがここに癒しの御業としてあらわされたのです。
ここで、これは意地悪な質問です。ほんとうに毎回そう思って祈っていますか？…と。
イエスさまに問われことを経験していただきたいのです。
「あなたはなおりたいのか？」「本当はどうしてほしいのか？」と。
その問いかけをきっかけにわたしたちは、ああ、神の御国を求める者であった。平和を求める者であった。癒しを求めて来たんだった…と気づかされるのではないでしょうか。
そうしてさらにイエスさまに目を向けていくとき、「起きよ、目を覚ませ」とわたしたち心に呼びかけるイエスさまの御声を聞くことができるのです。

かく言うわたしも、先日、ある姉妹方から、改めて教えられたことがあります。その方々は、信仰の成長の中で常々にこう教わってきたそうです。

必要があったら、神に求めなさい。ただひたすら求めなさい…と。

ああ、そうだ「求めよ、さらば与えられん」だ。いつもあたりまえに聞いていたその聖書の言葉が、わたしの中にイエスさまの御声として聞こえて来た体験でした。

エペソ人への手紙5:14にはこうあります。

…だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。

今もイエスさまは、その御声をもってわたしたちの心を呼び起こして下さいます。　だから、わたしたちは礼拝がやめられません。この方はわたしたちの心を呼び覚まして下さり、その救いの御業をあらわして下さることを期待できるからです。